ヘンデルの名前について

- **ドイツ語表記（Georg Friedrich Händel）**: ヘンデルは 1685 年にドイツのハレで生まれました。ドイツ語の本名は「ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル」です。
- **英語表記（George Frideric Handel）**: ヘンデルは 1712 年にイギリスに移住し、そこで成功を収めました。イギリスでは英語風に「ジョージ・フリードリヒ・ヘンデル」と名前が表記されることが一般的です。

なぜ名前が異なるのか？

この名前の違いは、単に言語と文化の違いによるものです。ヘンデルは生涯の大半をイギリスで過ごし、イギリス市民として認識されていたため、英語の名前「George Frideric Handel」が広く用いられるようになりました。それでも、彼の音楽はドイツ語圏でも高く評価されており、ドイツ語表記の「Georg Friedrich Händel」も一般的に使われています。

ジョージ・フリードリヒ・ヘンデル（George Frideric Handel）は、バロック時代の作曲家で、特にオペラとオラトリオで知られています。彼のオペラは、主に 18 世紀初頭のロンドンで上演され、当時のイタリア・バロックオペラの影響を受けながらも、英語のオペラに新たな方向性を提供しました。

ヘンデルのオペラの特徴

- **イタリアン・オペラの影響**: ヘンデルはイタリアで学び、イタリアン・オペラのスタイルを取り入れましたが、ロンドンでの公演の際には、英語でのオペラを試みました。
- **アリアとレチタティーヴォ**: ヘンデルのオペラは、感情豊かなアリアと進行を支えるレチタティーヴォ（話し言葉のような音楽）が特徴です。
- **ダイナミックな音楽**: 彼の音楽はドラマティックで、人物の感情や物語の展開を強調します。

主なオペラ

《アルミーダ》(Armida,

《アルミーダ(Almira)》**は、ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデルによって作曲されたオペラで、1705 年にハンブルクで初演されました。ヘンデルの初期のオペラの中で、彼の作曲家としてのスタイルが形成される過程を示す重要な作品です。

概要

- **作曲者**: ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル
- **台本**: シャルル・ジル(Charles de Boismortier)
- **初演**: 1705 年 1 月 8 日、ハンブルク
- **ジャンル**: オペラ・セリア(真面目なオペラ)
- **構成**: 全 3 幕
- **言語**: ドイツ語

あらすじ

《アルミーダ》は、愛と権力、誠実さと裏切りをテーマにした物語で、物語は王国を舞台に、複雑な人間関係と政治的な駆け引きを描いています。

第一幕

1. **王国の紛争**
    - アルミーダは、架空の王国アルメニアの女王であり、彼女の治世は危機に瀕しています。王位を狙う陰謀と、敵国の侵略が迫っています。
2. **愛と陰謀**
    - アルミーダは、彼女の愛人であるアグリッピーノと彼の親友であるフェルディナンドの間で複雑な感情を抱えています。フェルディナンドは、彼女に対して愛と裏切りの感情を持ちつつ、王国の運命に影響を及ぼす役割を果たします。

第二幕

1. **陰謀の発覚**

    - アルミーダは、彼女の信頼していた人物が裏切り者であることを発見し、王国の運命がさらに危うくなります。彼女はその人物の陰謀を暴こうと奮闘します。
2. **愛の試練**
    - アルミーダとアグリッピーノの関係は試練に直面し、彼らの愛が試されます。フェルディナンドの策略が、二人の関係に亀裂を入れます。

第三幕

1. **最終決戦**
    - 王国の存亡をかけた決戦が繰り広げられ、アルミーダは敵国との戦いに挑みます。彼女の指導力と勇気が試される瞬間です。
2. **解決と結末**
    - 戦いが終わり、アルミーダは勝利を収め、王国を守ることに成功します。物語は、彼女の誠実さと愛が勝利をもたらし、王国が平和を取り戻すことで幕を閉じます。

音楽の特徴

- **序曲**:《アルミーダ》の序曲は、オペラのドラマティックな雰囲気を予感させるもので、ヘンデルの作曲スタイルがよく表れています。序曲は、物語の緊張感を設定し、観客を引き込む役割を果たします。
- **アリアとアンサンブル**:
    - ヘンデルのアリアは、登場人物の感情や内面を深く掘り下げるものが多く、特にアルミーダとアグリッピーノのアリアが感動的です。
    - アンサンブルの部分では、登場人物たちの複雑な感情が交錯し、音楽的なドラマが展開されます。
- **オーケストレーション**: ヘンデルの音楽は、豊かなオーケストレーションと緻密な対位法が特徴で、オペラ全体に深みと立体感を与えています。

まとめ

《アルミーダ》は、ヘンデルの初期のオペラであり、彼の作曲家としての技術とスタイルが形成される過程を示す重要な作品です。愛と陰謀、誠実さと裏切りが交錯するドラマティックな物語が、ヘンデルの音楽によって見事に表現されています。このオペラは、ヘンデルの作品群の中でも特に初期のものとして、彼の音楽的な成長を感じさせる作品です。

《リナルド(Rinaldo)》

- **初演**: 1711 年
- **概要**: 十字軍時代の伝説を基にした物語。リナルドが魔女アルミーニアと戦い、愛する人を救うために奮闘します。
- **音楽の特徴**: ヘンデルのオペラの中でも特に華やかで、バロック・スタイルのアリアが豊富です。

《リナルド(Rinaldo)》**は、**ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル**によって作曲されたバロック時代のオペラで、1711 年にロンドンで初演されました。これはヘンデルがイギリスで制作した最初のオペラであり、彼の名声を高めた作品の一つです。

概要

- **作曲者**: ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル (Georg Friedrich Händel)
- **台本**: ジャコモ・ロッシ(Giacomo Rossi)、アーロン・ヒル(Aaron Hill)の原案に基づく
- **初演**: 1711 年 2 月 24 日、ロンドンのクイーンズ・シアター(Haymarket)
- **ジャンル**: オペラ・セリア(真剣なオペラ)
- **構成**: 全 3 幕
- **言語**: イタリア語
- **原作**: トルクァート・タッソの叙事詩『解放されたエルサレム(Gerusalemme liberata)』

あらすじ

《リナルド》は第一次十字軍の時代を背景にした、愛と戦いの物語です。主人公のリナルドと彼の恋人アルミレーナ、敵方の魔女アルミーダ、エルサレムの王アルガンテの間で繰り広げられる愛と策略のドラマが描かれています。

第一幕

1. **リナルドとアルミレーナの愛**
    - 十字軍の勇士リナルドと美しいアルミレーナは恋人同士です。彼らはエルサレムの包囲に参加しており、アルミレーナはリナルドの無事を祈っています。
2. **アルガンテとアルミーダの策略**
    - エルサレムの王アルガンテとその恋人で魔女のアルミーダは、リナルドの力を恐れ、彼を倒すための策略を練ります。アルミーダは魔法を使ってリナルドを誘惑し、アルミレーナを捕らえる計画を立てます。
3. **リナルドの決意**
    - アルミレーナが敵に囚われたことを知ったリナルドは、彼女を救うために決意を新たにし、戦いに挑む準備をします。

第二幕

1. **アルミーダの誘惑**
    - アルミーダは美しい風景と魔法の力でリナルドを惑わし、自分の虜にしようと試みます。彼女はリナルドに偽りの愛を囁き、彼を引き込もうとします。
2. **リナルドの抵抗**
    - リナルドはアルミーダの誘惑に一時的に揺さぶられますが、真実の愛であるアルミレーナへの思いを思い出し、アルミーダの魔法を打ち破ります。彼はアルミレーナを救出する決意をさらに固めます。
3. **アルガンテとアルミーダの対立**
    - アルガンテはリナルドの勇敢さに驚き、アルミーダと対立します。アルミーダは自分の魔力を使ってリナルドを再び捕らえようとしますが、彼の愛の力にはかなわないことを感じ始めます。

第三幕

1. リナルドの勝利
    - リナルドはアルミレーナを救い出し、アルガンテとアルミーダの軍勢を打ち破ります。彼の勇気と愛の力が勝利をもたらし、エルサレムの包囲戦で十字軍が勝利を収めます。
2. アルミーダの降伏
    - 最終的に、アルミーダはリナルドの愛の強さを認め、彼とアルミレーナの幸福を祝福します。彼女は魔法の力を捨て、平和を受け入れます。
3. ハッピーエンド
    - リナルドとアルミレーナは再会し、彼らの愛は強さを増して完結します。彼らの結婚が祝福され、平和と調和が訪れます。

音楽の特徴

- アリア「私を泣かせてください（Lascia ch'io pianga）」:
    - このアリアは、アルミレーナが囚われの身となったときに歌う悲痛な嘆きの歌で、ヘンデルのオペラの中でも最も有名なアリアの一つです。美しく感動的なメロディーが、愛と悲しみの感情を深く表現しています。
- バロック様式:
    - 《リナルド》は典型的なバロック・オペラであり、華やかな装飾音、リチェルカーレ形式、アリアの繰り返しが特徴です。リナルドのキャラクターを中心に、音楽はドラマの感情的な側面を引き出します。
- 合唱とアンサンブル:
    - オペラ全体にわたって、合唱やアンサンブルが物語の進行と感情の高まりをサポートします。特に、十字軍の兵士たちの合唱は、戦いの緊張感と栄光を表現します。

まとめ

《リナルド》は、ヘンデルの初期の成功を収めたオペラであり、彼のオペラ作品の中でも最も有名で評価の高いものの一つです。壮大なドラマと感動的な音楽が融合し、古典的なバロック・オペラの魅力を存分に味わうことができます。ヘンデルの巧みな作曲技法と、情熱的で表現豊かなアリアの数々が、聴衆を魅了し続けています。

《ジューダス・マッカバエウス（Judas Maccabaeus）》

- **初演**: 1747 年
- **概要**: ユダヤの英雄、ジューダス・マッカバエウスが古代の侵略者に対抗する物語。宗教的なテーマと戦争の英雄譚を組み合わせた作品です。
- **音楽の特徴**: 勇壮な合唱と感情的なアリアが特徴です。

《ジューダス・マッカバエウス（Judas Maccabaeus）》**は、**ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル**によって作曲されたオラトリオで、1746 年に初演されました。この作品は、ヘンデルのオラトリオ作品の中でも特に人気があり、愛国的で英雄的なテーマが特徴です。

概要

- **作曲者**: ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル（Georg Friedrich Händel）
- **台本**: トマス・モレル（Thomas Morell）
- **初演**: 1747 年 4 月 1 日、ロンドンのコヴェント・ガーデン劇場
- **ジャンル**: オラトリオ
- **言語**: 英語
- **背景**: マッカバイ戦争を描いた聖書の一部を基にしている

あらすじ

《ジューダス・マッカバエウス》は、紀元前 2 世紀にユダヤ人がシリアの支配者アンティオコス 4 世に対して反乱を起こし、宗教的自由を取り戻すために戦った歴史的事件、マッカバイ戦争を題材にしています。物語は、ユダヤ人の指導者であるジューダス・マッカバエウスが、圧倒的な敵軍を打ち破り、ユダヤの人々を導く姿を描いています。

第一部: 悲しみと希望

1. **ユダヤ人の嘆き**

- オラトリオは、ユダヤ人がアンティオコス４世による宗教的弾圧とエルサレム神殿の冒涜に悲しむ場面から始まります。ユダヤ人は神に助けを求めて祈り、救世主が現れることを願います。

2. **シモンの演説**
    - ジューダスの兄弟シモンがユダヤ人に希望を持たせ、神が彼らを見捨てないことを信じるように説得します。シモンの言葉は人々を勇気づけ、彼らを奮い立たせます。
3. **ジューダスの登場**
    - ジューダス・マッカバエウスが登場し、ユダヤ人に抵抗のリーダーシップを示します。彼は人々をまとめ、敵に立ち向かうための決意を固めます。ここで、ジューダスの英雄的な性格と指導力が強調されます。

第二部: 戦いと勝利

1. **戦いの準備**
    - ジューダスと彼の軍勢は、アンティオコスの軍隊に立ち向かう準備をします。ユダヤ人は祈りと共に出陣し、神の加護を信じて戦いに挑みます。
2. **戦いの勝利**
    - ジューダスと彼の軍勢は、敵軍を打ち破り、ユダヤ人の勝利を収めます。この勝利は、彼らが信仰と自由を守るために戦ったことの証です。勝利の後、ユダヤ人は神に感謝の歌を捧げます。
3. **勝利の歌「見よ、勇者は帰り来る(See, the Conquering Hero Comes!)」**
    - この有名な合唱曲は、ジューダスの帰還と勝利を祝うシーンで歌われます。力強いメロディとリズムが、ジューダスの英雄的な勝利を象徴しています。この曲は後にヘンデルの他のオラトリオ《ヨシュア》にも取り入れられました。

第三部: 平和と感謝

1. **平和の回復**
    - 戦いに勝利した後、ユダヤ人は再び平和を取り戻し、エルサレム神殿を修復し、神に捧げる儀式を行います。ジューダスの指導の下で、彼らは宗教的自由と信仰の回復を祝います。

2. **神への感謝**
    - オラトリオの最後では、ユダヤ人が神への感謝と賛美を捧げます。神が彼らを守り、導いてくれたことに対する感謝の気持ちが表現されます。ジューダスもまた、神の恵みと祝福に感謝し、ユダヤ人に未来への希望を示します。

音楽の特徴

- **合唱**: 《ジューダス・マッカバエウス》では、合唱が大きな役割を果たします。合唱はユダヤ人全体の声として、彼らの悲しみ、希望、勝利、感謝の感情を表現します。特に「見よ、勇者は帰り来る」の合唱曲は、力強く、感動的です。
- **アリア**: 個々のキャラクター、特にジューダスやシモンの感情や決意を表現するアリアが含まれています。これらのアリアは、彼らの個人的な感情とドラマを強調します。
- **オーケストレーション**: バロック時代の特徴である豊かなオーケストレーションが使われ、感情豊かな音楽表現をサポートします。トランペットやティンパニが用いられ、勝利のシーンをより壮大にしています。

まとめ

《ジューダス・マッカバエウス》は、ヘンデルのオラトリオの中でも特に人気があり、しばしば愛国的な意味合いで演奏されることが多い作品です。物語は信仰と自由を守るための戦いを描いており、その中で個人の勇気と集団の信念が際立っています。音楽的にも感情的にも豊かで、ヘンデルのオラトリオ作曲の才能を存分に感じることができる作品です。

《アリオダンテ（Ariodante）》

- **初演**: 1734 年
- **概要**: スコットランドの王子アリオダンテの物語。彼の恋人が裏切りに遭い、彼がその困難を乗り越えるストーリーです。
- **音楽の特徴**: 美しいアリアと緻密なレチタティーヴォが特徴です。

《アリオダンテ（Ariodante）》**は、ジョージ・フリードリヒ・ヘンデルによって作曲されたオペラで、1735 年に初演されました。このオペラは、イタリア語の台本による 3 幕構成の作品であり、ルドヴィーコ・アリオストの叙事詩『狂えるオルランド（Orlando Furioso）』から題材を得ています。愛、裏切り、名誉といったテーマが中心となっており、美しいアリアとドラマチックな展開で知られています。

概要

- **作曲者**: ジョージ・フリードリヒ・ヘンデル (George Frideric Handel)
- **台本**: アントニオ・サルヴィ（Antonio Salvi）作の台本を基にしている
- **初演**: 1735 年 1 月 8 日、ロンドンのコヴェント・ガーデン劇場
- **ジャンル**: オペラ・セリア
- **言語**: イタリア語

登場人物

- **アリオダンテ**: スコットランドの騎士、主人公（アルト歌手、カストラート、現在ではメゾソプラノやカウンターテナーが演じる）
- **ジネヴラ**: スコットランド王の娘、アリオダンテの恋人（ソプラノ）
- **ポリネッソ**: スコットランドの公爵、悪役でジネヴラに求愛する（アルト、現在ではカウンターテナーが演じる）
- **ダリンダ**: ジネヴラの侍女（ソプラノ）
- **ルルカーノ**: アリオダンテの兄（テノール）
- **リッシオ**: ダリンダの恋人、ポリネッソの策略に加担する（バリトンまたはテノール）
- **国王**: ジネヴラの父（バス）

あらすじ

第 1 幕: 愛と策略

物語はスコットランドで繰り広げられます。アリオダンテとジネヴラは愛し合っていますが、ポリネッソもまたジネヴラに恋心を抱いています。ポリネッソはジネヴラの気を引くことができないと悟ると、アリオダンテとジネヴラの愛を壊すために策略を立てます。

ポリネッソはダリンダを利用してジネヴラに近づきます。彼はダリンダに自分の愛を信じさせ、彼女の助けを借りてジネヴラの部屋に忍び込みます。その後、ポリネッソはリッシオにジネヴラが自分の愛を受け入れたかのように見せかけるよう命じ、アリオダンテにそれを目撃させる計画を立てます。

第 2 幕: 誤解と悲劇

アリオダンテはリッシオによって仕組まれた罠にかかり、ポリネッソがジネヴラの部屋から出てくるのを目撃します。これにより、アリオダンテはジネヴラが不貞を働いていると誤解し、絶望に陥ります。

国王はこの噂を聞き、娘の名誉を守るためにジネヴラを投獄しようとします。ポリネッソはこの混乱を利用し、自分こそがジネヴラと結婚すべき相手だと主張します。一方、アリオダンテは絶望のあまり自殺を試みますが、兄のルルカーノによって救われます。ルルカーノはアリオダンテの名誉を回復するためにポリネッソに決闘を挑むことを誓います。

第 3 幕: 真実の勝利

ダリンダはポリネッソの策略を知り、リッシオを問い詰めます。彼女はアリオダンテとジネヴラの名誉を回復するために真実を明らかにする決意をします。リッシオはポリネッソの陰謀を認め、ポリネッソの計画を国王に告げます。

アリオダンテとルルカーノはポリネッソと対決し、最終的にポリネッソは打ち負かされ、真実が明るみに出ます。ジネヴラの無実が証明され、彼女は解放されます。アリオダンテとジネヴラは再び結ばれ、国王も娘の幸せを祝福します。物語は皆が喜びに満ちて幕を閉じます。

音楽の特徴

- **美しいアリア**: ヘンデルのオペラの特徴である華麗なアリアが数多く含まれています。特に、アリオダンテが歌う「Scherza infida」(「不実を笑え」)は、悲しみと絶望を繊細に表現した美しいアリアとして有名です。

- **バロック時代のオーケストレーション**: リコーダーやヴィオラ・ダ・ガンバなど、バロック時代の楽器が使用され、独特の響きを持っています。オーケストラのパートは、感情の起伏を巧みに表現しています。
- **レチタティーヴォとアリアの対比**: ドラマの進行を助けるレチタティーヴォ（語りのような部分）と、キャラクターの感情を深く掘り下げるアリアがバランスよく配置されています。これにより、物語の流れが自然でありながら、音楽的にも豊かです。

まとめ

《アリオダンテ》は、愛と裏切り、名誉のテーマを描いたドラマティックなオペラです。ヘンデルの音楽は登場人物の感情を細やかに表現し、聴衆を深い感動に導きます。美しいアリアと巧妙なストーリーテリングが一体となり、バロックオペラの魅力を存分に味わうことができる作品です。現在でも世界中のオペラハウスで上演され、オペラ愛好者に愛され続けています。

《セメレ（Semele）》

- **初演**: 1744 年
- **概要**: 神話に基づく物語で、セメレがゼウスとの恋愛に翻弄される話。神々の力と人間の欲望が交錯します。
- **音楽の特徴**: 神話的なテーマに合わせたドラマティックな音楽と華麗なオーケストレーションが特徴です。

《セメレ（Semele）》**は、ジョージ・フリードリヒ・ヘンデルによって作曲された英語のオラトリオで、初演は 1744 年に行われました。この作品は、ギリシャ神話を題材にした異色のオラトリオであり、伝統的な宗教的テーマではなく、愛と欲望、嫉妬、神々の関係が描かれています。《セメレ》はしばしば「音楽劇」や「音楽的ドラマ」とも呼ばれ、その劇的な性質からオペラに近いものと見なされています。

概要

- **作曲者**: ジョージ・フリードリヒ・ヘンデル（George Frideric Handel）

- **台本**: ウィリアム・コングリーヴ（William Congreve）の台本を基にした、ヘンデルのオラトリオの一つ
- **初演**: 1744 年 2 月 10 日、ロンドンのコヴェント・ガーデン劇場
- **ジャンル**: オラトリオ（オペラ的要素を含む）
- **言語**: 英語

登場人物

- **セメレ**: カドモス王の娘で、ゼウス（ジュピター）の恋人（ソプラノ）
- **ジュピター（ゼウス）**: オリンポスの最高神、セメレの恋人（テノール）
- **ジュノー（ヘラ）**: ジュピターの妻、セメレに嫉妬する（メゾソプラノ）
- **イノ**: セメレの姉（ソプラノ）
- **アタマス**: テーバイの王子、セメレに求婚するが拒まれる（カウンターテナーまたはアルト）
- **カドモス**: テーバイの王、セメレとイノの父（バス）
- **サマーレス**: ジュピターが変身した老人、ジュノーに変装して現れる（テノール）
- **アポロ**: 太陽神（テノール）

あらすじ

第一幕: セメレの選択

物語は、セメレの父カドモスが、セメレとアタマスの結婚を祝うために宮殿で盛大な式典を開いているところから始まります。しかし、セメレはジュピターを愛しており、アタマスとの結婚を嫌がっています。彼女の願いは叶えられ、ジュピターが雷鳴と共にセメレを迎えに来て、彼女をオリンポスの宮殿へ連れて行きます。

第二幕: ジュノーの嫉妬と策略

オリンポスでは、ジュピターとセメレが幸福な時を過ごしていますが、ジュピターの妻ジュノーはこの関係に嫉妬しています。ジュノーはセメレに復讐しようと決意し、ジュピターのしもべであるアイリスに助けを求めます。

ジュノーは老婆の姿に変身し、セメレのもとに現れます。彼女はセメレに、ジュピターに対して本当の姿を見せるように要求するようそそのかします。ジュノーはセメレがジュピターの神の姿を目にした時、その力で彼女が命を失うことを知っていたのです。

第三幕: 悲劇的な結末

セメレはジュピターに対して本当の姿を見せるように要求します。ジュピターは危険を感じ、彼女をなだめようとしますが、セメレは意志を曲げません。最終的にジュピターは神としての姿を現し、その光と熱によってセメレは焼き尽くされてしまいます。

セメレの死後、ジュピターは彼女の死を悲しみますが、彼女の胎内に宿っていた子供が生きていることを発見します。その子供は後にディオニュソス(バッカス)と呼ばれる神となり、ジュピターはアポロに命じて、ディオニュソスを世界に導くようにします。

音楽の特徴

- **オペラ的要素**: 《セメレ》はオラトリオとして作曲されましたが、その劇的な内容と構成はオペラに近いものがあります。レシタティーヴォ(語りのような部分)とアリアが組み合わされ、物語の進行とキャラクターの感情を巧みに表現しています。
- **有名なアリア**: セメレのアリア「Endless Pleasure, Endless Love(終わりなき喜び、終わりなき愛)」は、彼女の幸福とジュピターとの愛を祝う華やかな曲です。また、「Myself I Shall Adore(自らを崇拝すべし)」は、セメレの自己陶酔と高慢を表現したアリアで、その音楽的な華麗さが聴きどころです。
- **合唱の使用**: 合唱は祭典の場面や、神々の声を表現する際に用いられ、作品全体に壮大さを与えています。

まとめ

《セメレ》はヘンデルの作品の中でも特異な位置を占めるオラトリオで、オペラ的な劇的要素と美しい音楽が融合した傑作です。愛と欲望、嫉妬が織りなす物語は、神話の世界の複雑さと人間の感情を反映しており、ヘンデルの音楽がそのドラマを豊かに表現しています。この作品は、現代でもオペラハウスやコンサートホールで上演され続けており、その魅力は多くの聴衆を引きつけています。

《セルセ(Xerxes)》

- **初演**: 1738 年
- **概要**: ペルシャの王クセルクセスの物語。彼の恋愛と権力闘争が描かれます。
- **音楽の特徴**: 独特の旋律と複雑なアリアが特徴です。特に「リーブ・アス(Ombra mai fu)」は非常に有名です。

《セルセ(Serse)》**は、ジョージ・フリードリヒ・ヘンデルが作曲した 3 幕からなるオペラ・セリアで、1738 年にロンドンで初演されました。この作品は、実在のペルシア王クセルクセス 1 世(セルセ)を題材にしており、愛と嫉妬、誤解と和解が複雑に絡み合ったコメディタッチの物語です。セルセはヘンデルのオペラの中でも特に異色であり、真剣さと滑稽さが絶妙にミックスされた作品となっています。

概要

- **作曲者**: ジョージ・フリードリヒ・ヘンデル (George Frideric Handel)
- **台本**: 原作はジョヴァンニ・ボナンニの台本に基づいており、ニコラ・フランチェスコ・ハイムが改訂を加えた
- **初演**: 1738 年 4 月 15 日、ロンドンのキングズ・シアター
- **ジャンル**: オペラ・セリア(だが、コメディの要素も強い)
- **言語**: イタリア語

登場人物

- **セルセ(クセルクセス)**: ペルシアの王(カストラート、現在ではカウンターテナーが演じることが多い)
- **アルサメーネ**: セルセの弟(カウンターテナーまたはソプラノ)
- **ロミルダ**: アルサメーネの恋人で、アリオダテスの娘(ソプラノ)
- **アタランタ**: ロミルダの妹(ソプラノ)
- **アリオダテス**: ペルシアの貴族で、ロミルダとアタランタの父(バス)
- **アマストレ**: セルセの婚約者だが、セルセに捨てられた女性(メゾソプラノ)
- **エルヴィーロ**: アルサメーネの召使い(バスまたはバリトン)

あらすじ

第 1 幕: 愛の混乱

オペラは、セルセが美しいプラタナスの木に向かって有名なアリア「オンブラ・マイ・フ(Ombra mai fu)」を歌う場面から始まります。この木を称賛するアリアは、オペラの序曲としても知られています。セルセはロミルダに恋していますが、ロミルダはセルセの弟アルサメーネと相思相愛です。セルセは自分の恋心をロミルダに伝え、彼女に結婚を申し込むが、ロミルダは断ります。

セルセはロミルダを自分のものにしようと決意し、アルサメーネにロミルダから手を引くよう命じます。アルサメーネはロミルダを愛しているため、この命令に悩みます。一方、アタランタは姉のロミルダとアルサメーネの関係を知り、アルサメーネを自分のものにしようと策を練ります。

第 2 幕: 誤解と嫉妬

セルセはロミルダを奪おうとし、アルサメーネとの仲を引き裂こうと画策します。アタランタはロミルダがセルセに心を動かされているという噂を流し、アルサメーネを惑わせます。アルサメーネはロミルダの誠実さを疑い、二人の間に誤解が生じます。

一方、セルセの元婚約者アマストレは、男装してセルセの宮殿に潜入し、復讐の機会をうかがっています。彼女はセルセがいまだに自分を愛しているのか、それとも完全に忘れ去ってしまったのかを確認したいと思っています。

第 3 幕: 和解と結末

アルサメーネとロミルダの誤解は解け、二人は再び愛を誓います。セルセは自分の計画が失敗したことを悟り、最終的にロミルダを諦めざるを得なくなります。

アマストレはセルセの前に現れ、セルセに自分の正体を明かします。セルセはアマストレの愛と忠誠に心を動かされ、二人は和解します。セルセはアルサメーネとロミルダの結婚を祝福し、アリオダテスの家族に幸せが戻ります。物語は全員が和解し、幸福な結末を迎えます。

音楽の特徴

- **「オンブラ・マイ・フ(Ombra mai fu)」**: このアリアは、オペラの中でも特に有名であり、ヘンデルの最も美しい旋律の一つとして広く知られています。セルセがプラタナスの木の陰で安らぎを感じるという内容で、シンプルで優美な旋律が特徴です。
- **レシタティーヴォとアリアの対比**: ヘンデルは劇的なストーリーテリングのために、レシタティーヴォとアリアを巧みに使い分けています。これにより、キャラクターの感情や物語の進行が生き生きと表現されています。
- **軽妙な音楽とコメディの要素**: 《セルセ》はオペラ・セリアでありながら、コメディの要素が多く含まれており、その音楽も軽快でユーモアに溢れています。特に、エルヴィーロが女装してアタランタの手助けをする場面など、滑稽なシーンが音楽的にもコミカルに描かれています。

まとめ

《セルセ》は、ヘンデルのオペラの中でも特異な作品であり、そのユーモラスで劇的なストーリーテリングと美しい音楽が特徴です。特に「オンブラ・マイ・フ」のアリアは、オペラの代表的な楽曲として広く愛されています。愛と嫉妬、誤解と和解が織り成す物語は、古典的なテーマでありながらも、現代の聴衆にも共感を呼び起こす要素を持っています。

《アグリッピーナ(Agrippina)》

- **初演**: 1709 年
- **概要**: 古代ローマの女性、アグリッピーナの権力と陰謀を描いた物語です。彼女が息子の帝位を確保しようと奮闘する姿が描かれています。
- **音楽の特徴**: ヘンデルの早期の作品で、バロック時代のオペラのスタイルが色濃く反映されています。

音楽の特徴と演出

- **バロック・スタイル**: ヘンデルのオペラは、バロック音楽の特徴を強調し、華やかな装飾音と豊かな和声を用います。
- **キャラクターの描写**: 各キャラクターの感情や動機が音楽を通じて深く描かれ、特にアリアでは感情の表現が豊かです。
- **合唱とアリア**: 多くの作品で合唱が重要な役割を果たし、ドラマを盛り上げるとともに、個々のアリアがキャラクターの内面を表現します。

《アグリッピーナ(Agrippina)》**は、ジョージ・フリードリヒ・ヘンデルによって作曲された 3 幕からなるイタリア語のオペラ・セリアで、1709 年にヴェネツィアで初演されました。このオペラは、古代ローマの歴史を題材にしており、ローマ帝国の権力闘争と政治的策略を背景に、野心的な主人公アグリッピーナが息子ネロをローマ皇帝にしようと画策する物語です。風刺的な要素も含まれており、当時の観客には非常に人気がありました。

概要

- **作曲者**: ジョージ・フリードリヒ・ヘンデル (George Frideric Handel)
- **台本**: ヴィンチェンツォ・グリマーニ (Vincenzo Grimani)
- **初演**: 1709 年 12 月 26 日、ヴェネツィアのサン・ジョヴァンニ・グリゾストモ劇場
- **ジャンル**: オペラ・セリア(風刺的、喜劇的要素を含む)
- **言語**: イタリア語

登場人物

- **アグリッピーナ**: クラウディウス皇帝の妻で、ネロの母(ソプラノ)
- **ネロ(ネローネ)**: アグリッピーナの息子で、後にローマ皇帝となる(ソプラノまたはメゾソプラノ)
- **クラウディウス(クラウディオ)**: ローマ皇帝(バス)
- **ポッペア**: 美しい貴族の女性で、ネロ、クラウディウス、オットーネに愛される(ソプラノ)
- **オットーネ**: ローマの貴族で、クラウディウスの信頼を得ている(アルトまたはカウンターテナー)
- **ナルチーゾ**: アグリッピーナの共謀者で、クラウディウスの側近(アルト)
- **パッラント**: アグリッピーナのもう一人の共謀者(バス)

- **レズビーノ**: クラウディウスの司令官（テノール）

あらすじ

第 1 幕: 陰謀の始まり

アグリッピーナは、夫クラウディウスが海戦で死んだとの知らせを受け、息子ネロを次期皇帝にしようと画策します。彼女はクラウディウスの側近であるナルチーゾとパッラントを説得し、彼らの助けを得てネロを皇帝にしようとします。しかし、クラウディウスは実は生きており、オットーネが彼を救ったことでクラウディウスは命拾いします。クラウディウスはオットーネを皇帝の後継者に指名することを約束しますが、オットーネはポッペアへの愛のため、権力に関心がありません。

第 2 幕: 愛と裏切り

アグリッピーナは、オットーネがポッペアを愛していることを知り、その情報を利用してオットーネを失脚させようとします。彼女はポッペアに対し、オットーネがクラウディウスに彼女を差し出して皇帝の座を得ようとしていると嘘をつきます。ポッペアはこれを信じ、オットーネを拒絶します。クラウディウスもまたポッペアに魅了され、彼女を手に入れようとします。

一方、ポッペアはアグリッピーナの陰謀に気付き、ネロを利用してアグリッピーナの計画を暴こうと考えます。ポッペアはネロに愛の言葉を囁き、彼を味方につけます。

第 3 幕: 逆転と結末

ポッペアの策略によって、クラウディウスはアグリッピーナの陰謀を知ります。しかし、アグリッピーナは巧妙にクラウディウスを言いくるめ、彼の怒りを鎮めます。クラウディウスは最終的にオットーネを許し、ポッペアとオットーネの結婚を認めます。また、ネロを次期皇帝にすることを約束し、アグリッピーナの野心は達成されます。こうして、アグリッピーナの計画は成功し、物語は大団円を迎えます。

音楽の特徴

- **ドラマティックなアリア**: 各キャラクターの感情や心理が、アリアを通じて巧みに表現されています。例えば、ポッペアのアリア「Bel piacere」は彼女の喜びを表現し、アグリッピーナの「Pensieri, voi mi tormentate」は彼女の策略と不安を表現しています。
- **レチタティーヴォ・セッコとアコンパニアート**: 物語の進行に合わせて、レチタティーヴォ・セッコ(乾いたレチタティーヴォ)とアコンパニアート(伴奏付きのレチタティーヴォ)が使い分けられ、登場人物の感情や状況をリアルに描き出しています。
- **合奏と独奏の対比**: オペラ全体を通じて、合奏部分と独奏部分のバランスが取られており、ドラマの流れを活性化させています。序曲も華やかであり、オペラの幕開けを盛り上げます。

まとめ

《アグリッピーナ》は、権力を巡る人間の欲望や策略を描いた、ヘンデルの傑作オペラの一つです。その風刺的で、時にはユーモラスな要素が観客を魅了し、初演時には非常に成功を収めました。今日でも、複雑な人物関係と巧妙な筋書き、そしてヘンデルの美しい音楽が相まって、オペラファンの間で愛され続けています。

結論

ヘンデルのオペラは、バロック時代のオペラの中でも非常に重要な位置を占めています。彼の音楽は、ドラマティックな要素と感情的な深みを持ち、イタリアン・オペラの伝統を受け継ぎながらも、イギリスでのオペラ界に新しい風を吹き込みました。

1703 年、大聖堂との契約を満了したヘンデルは、大学を辞めてドイツの中でもオペラが盛んであった自由都市ハンブルクへ出た。当時のハンブルク・オペラの中心的な作曲家はラインハルト・カイザーであった。ヘンデルはカイザーが運営するゲンゼマルクト劇場で第二バイオリン奏者として採用され、その後チェンバロの通奏低音奏者や演奏監督として活躍するなど、実地の経験を積みながらその影響を受けた。1704 年、借金の取り立てから逃れるためにヴァイセンフェルスに行ったカイザーに代わってヘンデルがオペラを

作曲することとなった。ヘンデルにとって最初のオペラとなったこの『アルミーラ』は 1705 年 1 月 8 日に上演され、約 20 回も上演される大成功を収めた。

同年 2 月 25 日には次のオペラ『ネロ』が上演されているが、これは評価が芳しくなかった。翌 1706 年にも 2 つのオペラ『幸福なフロリンド』『変容のダフネ』を作曲しているが（1708 年上演）、この3曲は一部の舞曲と断片を除いて消失している

ローマではローマ教皇庁の命令によりオペラの上演が禁止されていたため、ここでヘンデルは最初のオラトリオ『時と悟りの勝利』を作曲している。ローマではまたコレッリに会ってその影響を受け、またドメニコ・スカルラッティと鍵盤楽器の競演を行っている。チェンバロの腕前については評価が分かれ、スカルラッティの方が優れているとする者もあったが、オルガン演奏についてはヘンデルが圧倒し、スカルラッティ自身がヘンデルの強い影響を受けたという。再びフィレンツェのココメロ劇場で、ヘンデル最初のイタリア・オペラ『ロドリーゴ』が上演された。1708 年にはオラトリオ『復活』が上演されている。1709 年にヴェネツィアで上演されたオペラ『アグリッピーナ』は大成功を収め、連続 27 回も上演された。イタリア・オペラの中心地のひとつであるヴェネツィアで外国人の作品がこれほど成功するのは異例であった。

現地で「イル・サッソーネ」（イタリア語: il Sassone、ザクセン人の意）と呼ばれ親しまれたヘンデルはパトロン達の歓迎を受け、カンタータなども発表していたが、周辺国の侵攻や経済的没落により斜陽を迎えているイタリアに声楽と器楽の様式を十分に吸収したヘンデルが留まり続ける理由はなかった[

1710 年 6 月 16 日、25 歳のヘンデルはステッファーニの後任としてハノーファー選帝侯の宮廷楽長となったが、直後に 1 年間の長期旅行の許可を得た。ヘンデルはハレで年老いた母を訪れた後、デュッセルドルフに滞在し、その年の暮には初めてロンドンを訪れた。現地貴族らの要望を受けて 2 週間で書き上げたオペラ『リナルド』は、1711 年 2 月 14 日にヘイマーケット女王劇場で初演され、脚本を書いたアーロン・ヒル（英語版）が「これ以降イギリスは、母国イタリアをしのぐオペラを発信することになるのです」と高らかに宣言したアン女王への献辞の通り、シーズンが終了する 6 月 15 日までに 15 回の上演を数える大成功を収めた。アン女王に再度の来訪を約したヘンデルは、デュッセルドルフを経由してハノーファーに戻った。

テムズ川上のジョージ 1 世とヘンデル

翌 1712 年 11 月には再びロンドンを訪れ、ハノーファーに帰る約束があったにもかかわらずそのままイギリスに住み着き、『忠実な羊飼い』(1712 年)や『テセオ』(1713 年)などのオペラを書いた。1714 年のアン女王の死去に伴い、ハノーファー選帝侯がイギリス王ジョージ 1 世として迎えられることになるが、ヘンデルは 2 年以上もハノーファーを留守にしていたことを咎められることなく、新国王とは良好な関係を保った。1716 年にジョージ 1 世はハノーファーに戻り、ヘンデルもその随行員として久しぶりにハノーファーを訪れている。ロンドンに戻った後の 1717 年には、テムズ川での王の船遊びのために『水上の音楽』が演奏された。ジャコバイト党の反乱による政情不安等によりロンドンのオペラはいったん下火になるが、ヘンデルは、後にシャンドス公爵となるジェイムズ・ブリッジズの住み込み作曲家として『シャンドス・アンセム』や仮面劇を作曲した。

王室音楽アカデミーへの参加

ウィリアム・ホガースによるカリカチュア(1724 年)。左がヘイマーケット国王劇場でヘンデルのオペラとハイデッガーの仮面舞踏会(ほかにアイザック・フォークスの奇術ショーの看板も見える)、右がリンカーンズ・イン・フィールズ劇場でジョン・リッチー座のハーレクイン劇『フォースタス博士』に行列ができている。手前ではドライデンやシェイクスピアの本が紙屑として売られている。

投機熱の高まりの中、貴族たちによってオペラ運営会社「王室音楽アカデミー(英語版)」が 1719 年に設立され、ヘンデルはその芸術部門の中心人物となった。翌年の開幕に向けて、ヘンデルは歌手と契約を結ぶべくヨーロッパ大陸へ渡っている。またアカデミーのための音楽の大部分はヘンデルが作曲し、『ラダミスト』『ジューリオ・チェーザレ』『タメルラーノ』『ロデリンダ』をはじめとするオペラが上演された。アカデミーにおけるヘンデルのライバルは、イタリア人作曲家ボノンチーニであった。

1723 年に王室礼拝堂作曲家に任じられていたヘンデルはジョージ 1 世の死の直前の 1727 年 2 月 20 日にイギリス国籍を取得し、ジョージ 2 世の戴冠式のために大規模な『戴冠式アンセム』を上演した[7][66]。

しかしアカデミーの経営はずさんであり、カストラートのセネジーノ、ソプラノのフランチェスカ・クッツォーニ、メゾ・ソプラノのファウスティーナ・ボルドーニという 3 人のスター歌手に対する高額の報酬、およびクッツォーニとファウスティーナの争いもあって、ロンドンのイタリア・オペラは再び衰退していった。さらに 1728 年に上演されたジョン・ゲイの『乞食オペラ』は、すでに没落していたアカデミーに最後のとどめをさし、同年 6 月 1 日の『アドメー

ト』の再演をもってアカデミーは活動停止する。経営としては大失敗であったが、アカデミーがロンドンのオペラ文化の興隆をもたらしたのもまた事実であり、この 9 年間はヘンデルの生涯においてもオペラ活動の最盛期であった。

貴族オペラとの争い

資産運用により一定の財を蓄えていたヘンデルは、スイス人投機家ジョン・ジェームズ・ハイデッガーとともにアカデミーを建て直し、イタリアを訪れて歌手と契約を結んでドイツ経由でロンドンに戻った。再建されたアカデミーでヘンデルはオペラ『インド王ポーロ』(1731 年)などで成功を収めたが、1733 年にはヘンデルを庇護するジョージ 2 世に敵愾心を燃やす王太子フレデリック・ルイスによってアカデミーのライバルとなる貴族オペラが設立される。貴族オペラの作曲家はニコラ・ポルポラであった。さらにハイデッガーも 1734 年の契約満了をもってヘンデルと決別し、それまでアカデミーのオペラを上演していたヘイマーケット国王劇場を貴族オペラに引き渡してしまう。

ヘンデルはコヴェント・ガーデン劇場に移るが、貴族オペラ側はアカデミーから歌手を引き抜いた上、有名なカストラートのファリネッリを迎え、アカデミー側は苦戦をしいられた。作品の人気としてはヘンデル側の方が優勢であったものの、2 つのオペラハウスを賄うだけの需要は無く、第 2 期アカデミーは 1734 年をもって閉幕(これは当初の予定通り)。その後もヘンデルと貴族オペラの闘いは続いたが、貴族オペラは多額の赤字を出して 1737 年に倒産。破産こそ免れたものの、ヘンデル自身も経済と心身の両面で疲弊した。

ヘンデルは同年 4 月に卒中に襲われ半身不随となり、温泉治療のためアーヘンで夏を過ごした。奇跡的に回復した後は、再びハイデッガーと組んでオペラ『ファラモンド』や『セルセ』(クセルクセス)などの公演を続けるが、もはやロンドンでオペラが成功することはなかった。この頃からヘンデルの曲には他の作曲家からの「借用」(今でいうところの盗作)が目立つようになるが、当時は問題視されなかった。

オラトリオと晩年

現在も知られているヘンデルの曲の多くは、1739 年以降に作曲されている。

ヘンデルは 1732 年の『エステル』以来、英語のオラトリオをいくつか上演していたものの、1734 年から 1738 年まではオラトリオの新作を発表していなかった。ヘンデルは 1739 年

はじめにオラトリオのシーズンを開き、『サウル』と『エジプトのイスラエル人』を上演。同年秋には、『聖セシリアの日のための頌歌』を10日で仕上げた。続けて合奏協奏曲集の制作に取り掛かり、12曲を5週間ほどで書き上げた。この『作品6』は翌年に出版され、現在でも特に評価が高いバロックの弦楽合奏作品である。しかし、この2年間の音楽会シーズンはスペインとの戦争の勃発やロンドンを襲った大寒波により散々なものとなった。1740年から翌年にかけてオペラへの復帰を試みたが、『イメネオ』も『ダイダミア』も不振に終わった。

1741年、失意の中にあったヘンデルは、アイルランド総督ウィリアム・キャヴェンディッシュから翌年にかけてダブリンで開催される慈善演奏会への招待を受けた。これを承諾してアイリッシュ海を渡ったヘンデルが携えてきたオラトリオに、高い水準の音楽に親しんでいなかったダブリン市民たちは驚嘆し、次いで1742年4月13日に初演された『メサイア』は大好評であった。わずか24日で書き上げたこの作品は、ヘンデルにとって起死回生の一作となる。

同年秋にロンドンに戻ったヘンデルは、オペラの作成依頼を断り、ダブリンへ旅立つ前に作ったオラトリオを書き直した。この『サムソン』はロンドン市民らからも好評であったが、次いで『メサイア』も上演したところ、オラトリオの主な担い手であったピューリタリズムを精神的支柱とする中産階級からは受け入れられず、ダブリンでの反応とは対照的にこの時は不調であった。1743年4月に2度目の卒中を起こすが、まもなく創作活動を再開し、オラトリオに軸足を移して『ヘラクレス』などの傑作を送り出しつつ試行錯誤を重ねた。

1749年には、オーストリア継承戦争の終結を祝う祝典で打ち上げられる花火のために、『王宮の花火の音楽』を作曲する。1750年5月、オラトリオシーズン終了後に孤児養育院礼拝堂で慈善演奏会として『メサイア』を上演。収益は全額寄付した。この慈善活動はヘンデルが死ぬまでの間の恒例行事となった。

『愛すべき野獣』(1754年)
ヘンデルを風刺したジョーゼフ・グーピーのカリカチュア。
ヘンデルは大食漢で、音楽に関してはしばしば激しい感情をあらわにした。一方でユーモアもあり、寄付を積極的に行い、多くの社会層に友人を持っていた。

同年夏、ドイツ訪問の道中で馬車が転覆し負傷する。その後ロンドンに戻るが、『イェフタ』を作曲中であった翌1751年2月に左眼の視力の衰えが顕著となり、夏には片目

失明者となる。間もなく右眼の視力も悪化する。そのような中で『イェフタ』はなんとか完成させるが、1752 年頃には完全に失明したため作曲活動はできなくなった。その後も演奏活動だけは続けていた。1758 年の夏にタンブリッジ・ウェルズで眼科医のジョン・テイラーによる手術を受けたが、結局は成功しなかった。

翌 1759 年 4 月 14 日、体調の悪化により死去。74 歳であった。ヘンデルはウェストミンスター寺院に葬られることとなるが、ひっそりと埋葬されることを望んだ本人の願いにもかかわらず 3000 人もの民衆が別れを惜しむために押し寄せ、無数の追悼文が新聞や雑誌を賑わせた。

He's gone, the Soul of Harmony is fled!

（和声の主、君は逝き）

And warbling Angels hover round him dead.

（悲しみの天使は舞う、なきがらの上）

Never, no, never since the Tide of Time,

（汝こそは天地の開けし時ゆ）

Did music know a Genius so sublime!

（比類なき楽の天才）

Each mighty harmonist that's gone before,

（君が調べ、奏づるに）

Lessen'd to Mites when we his Works explore.

（なべての楽士、色失いぬ）

—4 月 17 日付『パブリック・アドヴァタイザー』、

ヘンデルが没した翌年にジョン・マナリング(英語版)によるヘンデルの伝記が出版された。音楽家の伝記が出版されることは当時としては異例であった。1784 年にはヘンデルの生誕百周年を祝って大編成の管弦楽団によるヘンデル記念祭が挙行され、その後も記念祭は続けられた。サミュエル・アーノルドによるヘンデル全集は 1787 年から 1797 年までかけて刊行された。

影響

ヘンデルは生前から高く評価され、没後すぐに神格化された。当時としては初めての試みである作品集が死後出版され多くの合唱団にヘンデルの音楽が受け継がれたこともあり、ヘンデルは名声が没後も衰えなかった最初の作曲家となった。

とくにオラトリオはイギリスに止まらず、1772 年にはハンブルクで『メサイア』が上演されたほか、1773 年にはカール・フィリップ・エマヌエル・バッハがドイツ語版の『メサイア』を上演している[1]。オラトリオは当時発達した市民レベルの合唱団に好まれた。エマヌエル・バッハは『メサイア』を何度も指揮し、これに刺激されて自らオラトリオを作曲するようになった。

1780 年代にはウィーンのヴァン・スヴィーテン男爵がその私的な日曜コンサートでヘンデル作品を広く紹介し、モーツァルトがこのコンサートのためにいくつかの曲を編曲している。また、ハイドンはロンドン訪問から帰るときにザーロモンからオラトリオ『天地創造』の台本を贈られたが、この台本は本来ヘンデルによる作曲を想定して書かれたものだったという。台本はヴァン・スヴィーテン男爵によってドイツ語に翻訳され、それにつけられた音楽はハイドンの代表作のひとつとなった。

ベートーヴェンはとくにヘンデルを高く評価し、『調子の良い鍛冶屋』にもとづく 2 声のフーガや、『ユダス・マカベウス』の「見よ勇者は帰る」にもとづくチェロとピアノのための変奏曲を作曲した。1824 年、ヨハン・アンドレアス・シュトゥンプフとの筆談において、ヘンデルがもっとも優れた作曲家だとベートーヴェンは答えたが、ヘンデル全集をベートーヴェンが持っていないことを知ったシュトゥンプフは後にアーノルド版全集を贈っている。